

新たな課題に直面する和歌山県の梅生産

取締役基礎研究部長 清水徹朗

梅干しはおにぎりの代表的な具であり、日本食に不可欠の食材である。その梅の日本最大の生産地は「南高梅」で知られた和歌山県であり、梅は和歌山県南部で最も重要な農産物であるが、近年、価格が低迷し、解決策が求められている。

1 梅生産の動向

2014年において、全国の梅の栽培面積(結果樹面積)は15.9千ha、生産量は98千トンであり、梅の生産額は212億円で果樹では第8位である。梅は健康食として注目されて80年代に消費量が大きく増加し、梅の栽培面積は75年に14.5千haであったものが、03年に18.3千haまで増加し、生産量は70年代の約6万トンから90年代には約12万トンまで増加した(第1図)。ただし、近年は消費量が減少して栽培面積は減少に転じており、生産量も頭打ちの状況にある。

2 中国からの輸入増加と原料原産地表示の導入

2000年代初頭まで消費量増加に伴って梅の

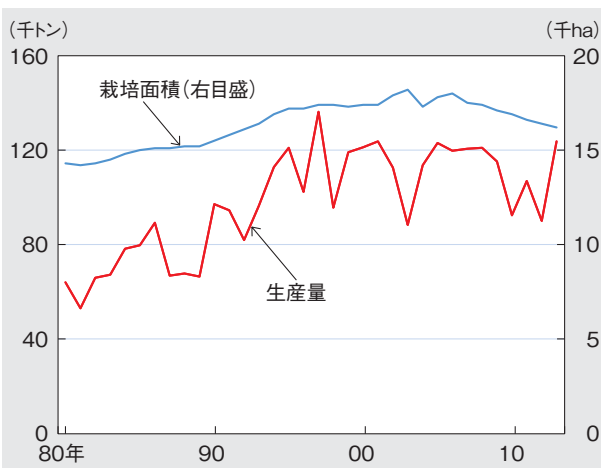
輸入量も急増し、75年に5千トンであった輸入量は、85年に15千トン、02年には49千トンまで増加し、一時は輸入品が供給量全体の5割を占める状況になった(第2図)。当初は台湾からの輸入が主であったが、90年代後半以降は中国からの輸入が多くなった。

しかし、中国産の梅を使用しているにもかかわらず、和歌山県内で加工して「和歌山県産」と表示するなどの問題が発生したため、政府は01年より梅に関し原料原産地表示を義務付けた。また、その後、消費の減少に加え中国産食品の安全性問題が発生したこともあり、梅の輸入量は減少に転じたが、13年においても23千トンを入力しており、供給量全体の3割近くを輸入品が占めている。

3 急増した和歌山県の梅生産

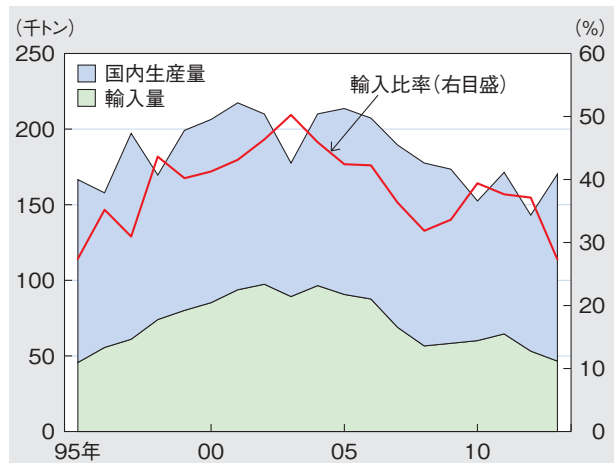
和歌山県では江戸時代から梅の栽培が盛んであったが、75年の栽培面積は1,600ha、生産量は11.2千トンであり、日本全体に占める割合は面積11%、生産量18%であった。それが80年代以降、和歌山県の梅生産は急拡大し、栽培

第1図 全国の梅生産量推移



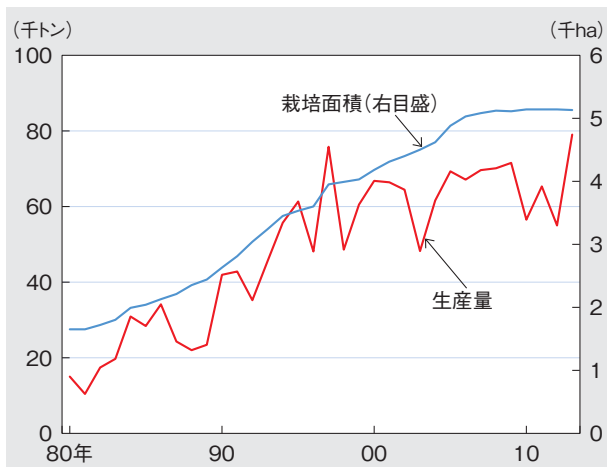
資料 農林水産省「果樹生産出荷統計」

第2図 梅の生産量と輸入量



資料 農林水産省「果樹生産出荷統計」、財務省「貿易統計」
(注) 本図の輸入量は青果換算(輸入統計×2)

第3図 和歌山県の梅生産量推移



資料 第1図と同じ

面積は90年2,630ha、2000年4,180haと急増し、14年には5,100haになっている(第3図)。その結果、全国に占める和歌山県の割合は、栽培面積32%、生産量65%で、出荷量では72%になっている。

和歌山県で梅の生産が急増したのは、オレンジ輸入自由化によってみかんや八朔に代わる作物への転換が求められたこと、南高梅のブランド化に成功したことがあり、当時、梅は作れば売れ、南高梅は高値で取引された。

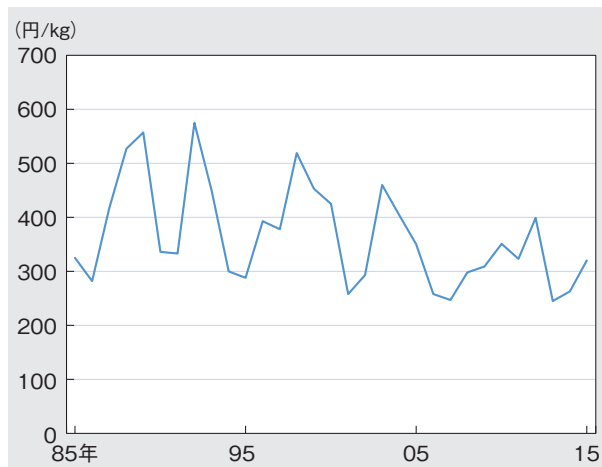
和歌山県のなかでも梅の栽培が特に盛んなのはみなべ町と田辺市であり、この2市町で県内の梅生産量の9割を占め、みなべ町や田辺市では農家のほとんどが梅の生産を行っている。なお、和歌山県の農業生産額は993億円であるが、そのうち果樹が60%を占め、梅(134億円)はみかん(248億円)に次いで重要な品目である。

この2地域の梅生産の発展において農協が大きな役割を果たし、農協(JA紀州、JA紀南)は販路拡大、ブランド確立のため様々なイベントや宣伝活動を行い、女性部が大都市のデパート等での実演販売も行ってきた。

4 梅の流通と加工

梅の収穫期は5月から7月であり、収穫した梅は、青果で出荷されるもの(青梅)と一次加工して出荷されるもの(白梅)がある。青梅は自家で梅酒や梅干しを作る消費者向けであ

第4図 梅の卸売価格の推移



資料 農林水産省「青果物卸売市場調査」

り、一方白梅は、農家が収穫した梅を塩水で漬けてから干したものであり、この状態では長期保存が可能になる。

梅加工業者は農家からこの白梅を仕入れ、味付け等の加工やパック詰めをして販売しており、田辺市やみなべ町には梅に関連する企業が多く存在する。南高梅は、はちみつ漬けなど食べやすい味にし、その実のやわらかさと相まって人気が沸騰したと言えよう。

5 低迷する価格と今後の梅生産の課題

このように和歌山県の梅は日本のトップブランドの地位を確立したが、近年、日本における梅の消費量は減少傾向にあり、1世帯当たりの梅消費量はこの10年間で約2割減少している。原料原産地表示によって中国からの輸入は増えていないが、日本の他産地との競争もあって梅の価格は低迷しており(13年245円/kg、14年263円/kg)、梅生産をやめる農家が出てきている(第4図)。

和歌山県の梅生産農家は、温州みかんでかつて行ったような廃園を含んだ需給調整や新たな価格安定制度の導入を求めているが、梅を今後導入が検討されている収入保険の対象にすることで、日本食普及と一体となった梅の輸出市場開拓など新たな需要を創出することが今後の重要な課題であろう。

(しみず てつろう)